

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00693

研究課題名（和文）英語史における三人称主語評言節の文法化・主観化研究

研究課題名（英文）The historical development of comment clauses including the third-person pronoun it from the perspectives of grammaticalization and subjectification

研究代表者

福元 広二（Fukumoto, Hiroji）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：60273877

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英語史における三人称代名詞Itを含む評言節を文法化・主観化の観点から考察した。中英語期における三人称代名詞Itを含む用例を調査した結果、まだ補文標識thatが脱落しておらず、It+動詞+that節の形式が多くみられた。しかし、初期近代英語期に入ると、補文標識thatなしで、使われる例が多く見られるようになり、文頭だけでなく、文中や文末にも置かれるようになり挿入的な用法も見られた。その後、主語Itの脱落や補文標識thatの脱落が見られ、文法化・主観化が見られることを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究における学術的意義としては、三人称代名詞Itを主語とする表現が英語史のなかで補文標識thatや主語Itの脱落とともに文法化していく様子を明らかにすることができた。このことはこれまであまり扱われてこなかった評言節の史的発達に貢献できると思われる。その一方で、中英語期や初期近代英語期においてよく使用されていた三人称代名詞Itを主語とする表現が次第に見られなくなる例もあることを指摘することができた。

研究成果の概要（英文）：The focus of the present research has been to explore the historical development of comment clauses including the third-person pronoun it from the perspectives of grammaticalization and subjectification. In the Middle English period, there were many examples in which the personal pronoun occurred with a complementizer that. In the Early Modern English period, however, the conjunction was dropped in some examples. Then, the expressions without the conjunction began to be used not only at the beginning of a sentence, but also in the middle or at the end of a sentence. Later, some examples show the omission of the subject it. It has been revealed from this research that some comment clauses including the third-person pronoun it have undergone the process of grammaticalization and subjectification.

研究分野：英語学

キーワード：英語史 評言節 文法化 主観化

1. 研究開始当初の背景

評言節 (Comment Clause)は、Quirk et al. (1985: 1112-1118)の用語であり、この文法書では、現代英語における評言節を機能的な観点から6つに分類し、用例を挙げながら評言節の用法について解説している。それ以前の英文法書においても、用語は異なるものの、Kruisinga (1932: 484-487)や Jespersen (1937: 82-83)などで同様の現象を扱っている。その後、評言節研究は、談話標識の一部として研究が行われ、談話標識に関する個別の研究が数多く行われてきた。しかし、1991年のThompson and Mulac (1991) “A quantitative perspective on the grammaticalization of epistemic parentheticals in English.”によるI thinkの文法化研究により、評言節の研究が文法化の観点から盛んに行われるようになった。そしてその集大成とも言える研究が1996年にBrintonによるPragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions. (Berlin: Mouton de Gruyter.)が出版された。2000年以降になると、様々な語用論標識を文法化の観点から考察する研究が始まった。2008年には、BrintonによるThe Comment Clause in English. (Cambridge: Cambridge University Press) が出版され、談話標識や語用論標識の中でも、特に評言節に焦点を当てた研究が進んできた。

特に、文法化・主観化の研究は、21世紀に入りますます盛んになってきており、国内学会でも、文法化を冠した研究発表やシンポジウムが行われている。評言節に関しては、2009年5月29日に日本大学で、近代英語協会第26回大会シンポジウム『Comment Clauseの歴史的発達』が開催され、その後、『Comment Clauseの史的研究—その機能と発達—』が2010年に出版された。そして評言節の一つを取り上げ文法化の観点から考察する論文が最近も発表されている。国外においても、文法化の研究は国内以上に盛んに行われている。国際学会においてもInternational Conference on English Historical Linguisticsでは毎回テーマの一つに取り上げられている。評言節に関しては、歴史語用論の観点から考察する研究論文が増加していることも最近の動向として挙げる事ができる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでほとんど扱われていない三人称代名詞 It を含む評言節を文法化・主観化の観点から通時的に考察することである。具体的には、三人称代名詞を含む評言節の中でも、Itを形式主語とし、動詞+that節、や形容詞+that節が後続する構文に焦点を当てて、中英語期から後期近代英語期におけるデータを収集し、どのような用例において、主語Itの脱落や補文標識thatの脱落が見られるかを考察する。また、統語的な観点から、どのような用例において、補文標識thatの脱落により、文中や文末で見られるのかを調査する。最後に、一人称代名詞を含む評言節や二人称代名詞を含む評言節との比較研究を行い、三人称代名詞の評言節の英語史における特徴を明らかにしたうえで、評言節全体の通時的变化を明らかにする。

評言節の通時的な研究については、歴史語用論の枠組みにおいて、語用論、文法化、談話標識、会話分析などの観点から考察している研究がほとんどである。これまでの研究で扱われているテーマは、I think, I guessのような一人称代名詞を含むタイプやyou know, you seeのような二人称代名詞を含むタイプであり、本研究で扱う三人称代名詞Itを含む評言節の通時的な研究は、これまで全く行われていないので、三人称代名詞Itを含む評言節が、次第に文法化していくという現象を明らかにし、評言節全体の通時的变化を明らかにすることを目的とする。

特に、評言節の中でも、三人称代名詞Itを含む評言節で、例えばIt may be that から maybe への通時的变化では、モダリティに関する文法化・主観化という観点から考察する。また、It is needless to say that から needless to say の発達では独立不定詞の文法化の観点からも分析を行う。さらに、as it were that から as it were のようなイディオム化についても、談話標識への発達という観点からの考察を行う。そのほか、Itを主語とする数多くの構文が英語史では見られるので、これらを包括的に考察する。

3. 研究の方法

本研究は、中英語期から近代英語期に見られる評言節 (Comment Clause)を文法化・主観化の観点から考察することである。これまで評言節の研究は、一人称代名詞を含むタイプ (I think, I guess) や二人称代名詞を含むタイプ (you know, you see) について、談話標識や文法化の観点から研究が行われてきたが、三人称代名詞を含むタイプはこれまでほとんど扱われていない。そこで本研究では、三人称代名詞を含む評言節の中でもItを形式主語とし、動詞+that節や形容詞+that節が後続する構文を取り上げ、中英語期から後期近代英語期におけるデータを収集する。そして、これらの用例の中で、主語Itの脱落や補文標識thatの脱落が見られる用例に焦点を当てて、イディオム化や文法化が見られるかを考察する。さらに、三人称代名詞の評言節の英語史における特徴を明らかにしたうえで、これまで申請者が研究を行ってきた一人称代名詞と二人称代名詞を含む評言節との比較研究を行い、評言節の通時的な発達の全体像を浮き彫りにする。

最初に、中英語期における三人称代名詞を含む評言節の用例収集から研究を行う。Itを形式主語とし、真主語がthat節以下であるような構文に限定して用例を収集する。It+動詞+that

節や It+形容詞+ that 節の形式をしている構文の用例を中英語の作品から収集する。また、主語 It の脱落や補文標識 that の脱落が見られる場合も用例を集める。そして、統語的に、補文標識 that の脱落により、三人称代名詞を含む評言節が文中や文末で見られる挿入的な用法についても注目していく。

次に、初期近代英語期における三人称代名詞を含む評言節の用例収集を行う。まずは、初期近代英語期における劇作品における用例収集を行う。さらに、1500年から1700年までの初期近代英語期の散文作品における三人称代名詞を含む評言節の用例を収集していく。劇作品だけでは、コーパスサイズが小さいので、データを増やすためには、様々なジャンルの散文からデータを取る必要があるからである。さらには、1700年から1800年までの後期近代英語期におけるデータを収集する。18世紀になると多くの資料が残っているので、評言節のデータも多く集めることができる。この時代は、様々なジャンルのデータを扱うことが可能になるのであるが、ジャンル間の違いについて特に注意を払いながらデータを収集する。その方法で、後期近代英語期における三人称代名詞を含む評言節の用例を収集する。この時期については、電子コーパスを利用しながら、用例収集にあたる。後期近代英語期においては、劇作品からのデータだけでなく、小説からのデータ収集をすることでジャンル間の比較を行う。

最後に、これまでに収集してきたデータの比較検討と考察を行う。文学作品の中でも、書簡、劇、小説など様々なジャンルからの三人称代名詞を含む評言節の用例を収集しているので、まずは、中英語、初期近代英語、後期近代英語でそれぞれの時代毎に分類された三人称代名詞を含む評言節を比較していく。その後、それぞれのジャンルごとに特有用例を分類する。また、主語 It の脱落や補文標識 that の脱落が見られる場合も用例ごとに分類し、文法化・主観化が見られるかを考察する。最後に、三人称代名詞の評言節の英語史における特徴を明らかにしたうえで、一人称代名詞を含む評言節や二人称代名詞を含む評言節との比較研究を行い、英語史における評言節全体の特徴を明らかにしていく。

4. 研究成果

研究成果は、大別して以下の3点である。

(1) 三人称代名詞を含む評言節の通時的調査

三人称代名詞を含む評言節、具体的には、It を形式主語とし、真主語が that 節以下であるような構文に限定して用例を収集した。その結果、もともと、It + 動詞 + that 節や It + be 動詞 + 形容詞 + that 節の形式をしている構文が英語史の中で、まず補文標識の that が脱落し、その後、形式主語 It が脱落していく様子が観察された。例えば、It may be that から次第に、It may be になり、そして、may be、最終的に、maybe と文法化していく様子が見られた。そのほかに完全に文法化しているとは言えないタイプも見られた。例えば、It may hap that, It may happen that などは、16世紀において It が脱落し、may hap, may happen のような用例が見られたが、このような評言節はその後見られなくなる。

その一方で、三人称代名詞を含む評言節が使われなくなるタイプも見られた。例えば、seem に関しては、中英語期には、it semeth that や as it semeth me のように as を伴っている例が見られるが、初期近代英語期に入ると、it seems は、that 節の補文標識 that なしで使われ、文頭だけでなく、文中や文末においても使用されるようになるが、次第に文中で使用される用例は減少していく様子が見られた。同様に、副詞 belike と同じような意味を表す It is likely も初期近代英語期においては、文頭だけでなく文中や文末に置かれて、話者の推量を表す用例が見られるが、この評言節も、次第に挿入節の用例が減少していくことが明らかになった。

(2) 三人称代名詞を含む評言節のジャンル比較

本研究では、詩、劇、小説などの様々なジャンルの文学作品をデータとして扱い、三人称代名詞を含む評言節がどのジャンルに多く見られるかを調査した。その結果、口語性の高いジャンルにおいて、評言節の文法化や主観化の割合が高い様子が見られた。特に、劇作品において、評言節の文中や文末の用例が多く見られることがわかった。劇からのデータにおいて、社会言語学的・語用論的観点からは、下層階級の台詞において評言節の例が多い結果も見られたが、これに関しては、データをもっと増やす必要があり今後の課題としたい。

(3) 評言節における人称間の比較

三人称代名詞を含む評言節を、一人称代名詞を含む評言節や二人称代名詞を含む評言節との比較を行った結果、一人称代名詞を含む評言節は、思考動詞や発話動詞に多くみられ、二人称代名詞を含む評言節においても、思考動詞に多くみられるが、三人称代名詞を含む評言節は、一人称代名詞や二人称代名詞に比べて、あまり種類が多くないことが明らかになった。しかし、三人称代名詞を含む評言節の種類は少ないものの頻度に関しては、初期近代英語期においてはかなりの頻度で使用されていることも分かった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 秋元 実治、片見 彰夫、福元 広二、田辺 春美、山本 史歩子、中山 匡美、川端 朋広、秋元 実治	4. 発行年 2023年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 280
3. 書名 福元広二 「16世紀の文法的・構文的变化」 『近代英語における文法的・構文的变化』第2章 (pp. 41-75)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------